

讃岐守時代の道眞

西尾, 陽太郎

<https://doi.org/10.15017/2339036>

出版情報 : 史淵. 42, pp.79-109, 1949-12-15. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

讚岐守時代の道眞

西尾陽太郎

一

菅原道眞に關する數多くの傳記・研究中、その讚岐守時代は從來殆んど注目されてゐない部分である。明治以前の菅公傳なるものの中心点はどちらかと云へば天滿大自在天神としての道眞を説くといふ、宗教的立場にあつたもので、かかる立場からは道眞の讚岐守時代に對する閑却は當然生じ得る。明治以後、殊に明治三十五年菅公歿後千年に當つて、その記念のために道眞に關する傳記・論説が發表せられたが、其處に見られる傾向は人間主義的・政治史的であり、從來の宗教的なものは斷乎として否定せられてゐる。しかもこの新傾向において道眞評價の基準となつたものは道德的觀點と性格的觀點との二つであつて、人間道眞・政治家道眞をこの二点によつて褒貶してゐるのである。そしてこの場合にもその傳記の焦点が左遷事件におかれるために、道眞の讚岐守時代は見逃され勝ちであり、精々詩人としての道眞を強調する場合に、この時代の作品が取扱はれる位のものであつた。高山林次郎・井上哲次郎・近くは菊池寛などの諸氏がこの点に注目し

てゐる人々である。

然しながら、卑見によれば道眞の讚岐守時代はその一生の經歷中軽く取扱はるべきものではない。却つて道眞を正確に把握しようとするためには見逃す事の出来ぬ部分であると考へられる。抑々一個人の傳記の構成にとつて最も大切なるものは、その個人の個性的展開の記述であつて、個性と環境との相關々係によるその行爲が全的に構成的に把握さるべきであり、殊に道眞の如きその性格的にまた歴史上の遺業の点から見て本質的に詩人と考へらるべき人間を取扱ふ場合には、その内面的諸聯關に對する解釋學的理解が必要とされるのでなければならぬ。かかる点から道眞の讚岐時代は注目すべき意義を有つものである。上代貴族社會の一員でありまた特に詩人であつた道眞には、今更歴史學上新しい積極的價値が見出されるわけでもなく、且つ余りにその存在が通俗化されてゐるためにその傳記について云爲することも卑近のそしりをまぬかれぬが、しかも道眞は吾國文藝史上の或は平安朝前期政治上の注目すべき存在たることは失はれないのであつて、偶々道眞の全傳を考察すべき機會を得て、彼の讚岐守時代の意義の新しく見直さるべき事を感じたのである。

さて道眞の讚岐守時代を考察すべき資料となるものは菅家文章卷三・卷四に收められた道眞の詩文を唯一のものとする。周知の如く菅家文章はその序列に於て殆んど正確に年代的に配列されて居り、道眞の傳記的考察には最も便宜のあるものである。卷三・卷四はその讚岐赴任直前即ちその出發より、秩滿ちて歸京直後までの文藻を集めたものであつて、これを仔細に見る時は彼の地方在任中の行動の本質的なものについて

相當具體的に知ることが出来る。今それを次の文學・政治・思想の三点に分けて見ることが出来る。

一、道眞の自己の本質的個性に對する自覺への到達

二、地方官としての道眞の行動

三、在任中における老莊思想への傾向

然し以上三点の敘述に入る前に、彼の讃岐赴任の事情について見る必要があるであらう。といふのは彼自身この赴任を一種の左遷と感ぜざるを得ぬものがあつたのであるから、その間にやや複雑なものが考へられ、且つこの感が赴任以後の道眞の心境に影響して來る事は當然であるから、旁々この赴任の事情には一應注目せねばならない。

仁和二年正月十六日、從五位上行式部少輔兼文章博士の任にあつた道眞は讃岐守に任ぜられた。(三代實錄同年同月條) 時に年四十二。而してこの地方官任命は一見其處に何等特別な事情を考へる必要はないとも云へる。例へば菅家歴代について見ても文章博士たりし古人・清公・是善は皆夫々に地方官の經歷を有して居り、職原鈔文章博士の條によれば、「此職に居る者必ず參政に轉ず」とあつて、參政に轉ずる必要上地方官の經歷が豫め道眞にも今や與へられたものであるとも解する事が出来る。文章博士に居る事既に九年目に入つてゐた彼の此度の任命はかかる見方からする時、むしろ當然の事であつたと考へてよい。

しかるに菅家文章卷三の冒頭、彼の讃岐への出發の感慨を見る時誰しも其處に彼の身邊に一種の感情的葛

藤のある事を察し、且つ道眞自身の心境に穩かならざるもののある事を感じずには居られない。即ち彼の讀岐守任官直後の廿一日宮中に内宴あり、女樂を奏し文人を喚びて詩を賦す事が行はれ、これが同時に道眞に對する送別の宴ともなつた。(三代實錄) 道眞の「早春内宴官妓柳花怨を奏するを聽く云々」の應製の詩はこの時のことであり、「予外吏となりて幸に内宴裝束之間に待す。公宴に預るを得るは舊例有りと雖も又殊恩也」(文章卷三)と彼は云つてゐる。然るに彼はこの語に續いて次の如く記してゐる。「王公次に依つて酒を詩臣に行ふ。相國(基經筆者註)次に當るを以つて又盃を辭すべからず。予が前に忝立して行かざること須臾にして吟じて曰く明朝風景何人にか屬すと。一吟之後予に命じて高詠せしむ。命を蒙りて詠せんと欲す。心神迷亂して纔かに一聲を發して涙流れて嗚咽す。宴罷みて家に歸りて通夜睡らず。默然として止だ病むが如く胸塞る。云々」

この太政大臣基經の態度は如何に解すべきであるか。また道眞の心神迷亂と稱せられる心の動きは何を意味してゐるか。其處には從來云はれてゐるやうに、單なる感激とは云へない基經の惡意的なものによる道眞の心の動搖が感ぜられることは明かであらう。従つてこの感慨の表現たる彼の詩

自聞相國一開脣 何似風光有主人

忠信從來將竭力 文章不道獨當仁

含誠欲報承恩久 發詠無堪落淚頻

若出皇城思此事 定啼南海浪花春

も表面上は基經に對する報恩忠誠を云つてゐるが、裏面にはかかる道眞の基經に對する氣持が基經によつて受け取られない事を悲しんでゐるものと解すべきであらう。

ところでこの間の事情については從來はつきりした事は云はれてゐない様である。この内宴の席には基經の家令であつた左少辨大學頭藤原佐世があり、彼は道眞のこの時の様子に對して詩一篇を寄せて慰めたのである。(文章同條)一般には佐世が後に阿衡事件の一方の首領であつたことから推して、この時にも佐世の背後的勢力であつた基經が元來道眞の存在に對する惡感情を有ち、それが偶々この時に示されたものであらうとされてゐる。この推定は確かに適中してゐるものであるが、卑見によればこの事情は今少し明瞭にする事が出来るやうに思はれる。

元慶八年二月二十五日、道眞は奏狀を上り、文章博士一員の闕を補充せられん事を請ふた。これは三代實錄には見えないが菅家文章卷九に全文が遺されてゐる。そしてこの結果と思はれるものが三代實錄五月廿六日の條に「右大辨從四位上兼行勘解由長官橋朝臣廣相を文章博士となす」と示されてゐる。ここに後の阿衡事件の發端があるのである。それ故この廣相の就任は、道眞・廣相對基經・佐世の關係を直ちに思ひおこさしめるものである。江談抄卷五によれば廣相は道眞の父是善の門人であつたと考へられ、且つ後に阿衡事件に關して道眞が讃岐から基經に奉呈したといはれる意見書(政事要略)を彼のものとすれば、道眞はこの事件において廣相を全面的に支援してゐるのであつて、この点から考へて、元慶八年五月の廣相の文章博士就任は恐らく道眞の推擧が採用されたものと見る事が出来る。

しかるに一方佐世は基經の家令であつて、基經は佐世をこの文章道に進ましめんと種々苦心した事は江談抄に見えてゐる既に周知の事である。而してこの江談抄「藤氏献策始事」の文中、道眞について注目すべきは、「藤氏策を献ずるの始めは佐世なり。昭宣公の家司にて家を起さるるに、天神も引添へられて座し給ひければ、時の儒者等皆悉く用ゐざりければ、昭宣公歎息せられて、切々請はる云々」の句である。即ち佐世の出世について基經は道眞を味方にしようとしてゐたのであり、この事は道眞の文章に見ても彼が屢々基經の一身に關して文章を草してゐて、兩者の關係はむしる密接なるもののある事がうかがはれる事によつても傍證せられる。文章博士時代の道眞は當時の學閥的對立に災されて不快な誹謗にとりまかれてゐるが、この事の一面には「時の儒者等悉く用ゐざりければ云々」といふ佐世に對する關係が道眞にまで及んでゐた事も考へさせられるものがある位である。しかるに文章博士の缺員は廣相によつて補充せられ、佐世は元慶二年三月に大學頭、仁和二年正月に左少辨となつたが、文章博士の地位は他に奪はれたといつてよい。基經の道眞に對する感情がこの時から悪化したものと推察されるのであり、自己の側に「引き添へて」ゐた筈の道眞の行爲に對して、それだけ不快の念が大きかつたと考へられる。道眞としては性格的にも權貴におもねる事は巧みでなく、且つ文章博士時代は競々としてひたすら謹直嚴正を以つて身を處するより他はなかつた時代であつたことは、その傳記を見るものを知るところであるから、當時の儒者の評判の手前からもその反對を押切つて佐世を推擧する事は到底出來ぬ事であり、これに比して廣相は適當な人物であつた。そしてこの適當という事の意味の中には、その學才の他に尙廣相の女が宇多帝の女御となり、その所生の齊世親王が道

眞の女婿であるといふ關係も考へるべきであるかも知れない。(尊卑文脈)道眞としてはこの度の推舉は基經に對しても、他意あるわけではなかつたが、基經から見れば不快なゆき方であつたと思はれる。

尙ほこの他基經の道眞に對する惡感情に一因をなしてゐるのではないかと思はれるものに、三代實錄元慶八年五月九日條に「勅有り、諸道博士等をして太政大臣に職掌有りや否や並に大唐の何官に當るやを勘奏せしむ」とあることであつて、廿六日の條には諸博士の勘奏文が擧げられてゐる。而してこの中諸博士のものが比較的文章の表現に餘裕をもたせ、修飾がほどこされてゐるのに對して道眞のものは最も明確に「太政大臣に職掌なし」と論斷してゐるのであつて、このことが太政大臣基經にとつて何らかの不快の念を興へてはゐないかと思はれる。基經は元來性格的に底意地のある人物であり、且つ外戚關係のないために當時自己の進退に極めて敏感な態度を示してゐたのであつて、後に「阿衡」の文字にも拘泥した事を考へると、道眞のこの論斷の明確さが彼にとつて一つの「阿衡事件」と同性質の感じを有たせなかつたとは云へない。然しこれは諸博士の論定と相對的問題でもあり、今は推定の程度に止めておく。

二

さて道眞は次いで出發に先立ち、再び佐世及び基經の邸に招かれて餞別をうけてゐる。恐らく内宴における彼の姿が彼等兩人をして惻隱の情を生ぜしめた故でもあらう。佐世の邸にては道眞は一詩を賦し、佐世に對して父是善の門人たる誼しみを忘れざらん事を云つてゐる。文章博士時代の四度に亘る不快な誹謗事件の

結末が、この地方赴任となつた如き立場にあつた彼は、同時に常に門人達が權貴に阿附して舊師の恩を忘れるものの多いのを心淋しく思つてゐた。この事は未だ是善の生前から見られたことであり、是善の門人で道眞の青年時代までの師、島田忠臣が太宰少貳の任を終へて歸京した時にもこれをよるこび迎へて、「若し會つて室に入りしを相忘れずば、殷勤に我が家君を存感せよ」と云ひ、その註に「門人多しと雖も意を用ゐること昔に異なり。故に之を囑す」と記してゐる。佐世は基經の家司にして是善の門人であり、道眞に對する地位は微妙なものがある。彼は佐世に複雑な意味を籠めてその詩を詠じてゐるのである。更に基經邸にては「吏となり儒となるもすべて國恩に報ずる」の覺悟を云つて訣別した。そして最後に彼の自邸にて同門の人に別れたが、この時はさすがに彼も自己の心情をかくす事は出来なかつた。

我將南海飽風煙 更妬他人道左遷

情憶分憂非祖業 徘徊孔聖廟門前

其處にやはり左遷といはるべき何物かのある事は否めないものであり、かかる心情を抱いての行路が如何なるものであつたかは例へば、「中途送春」の示すところである。

春送客行客送春 傷懷四十二年人

思家淚落書齋舊 在路愁生野草新

花爲隨時餘色盡 鳥如知意晚啼頻

風光今日東歸去 一兩心情且附陳

さて讃岐國は延喜式卷二十四主計上に「讃岐國行程上十二日。下六日。海路十二日」と見え、卷二十二民部上に「讃岐國。上。管、大内・寒川・三木・山田・香川・阿野・鶉足・那阿・多度・三野・刈田」と見える。國府は現在の綾部郡（阿野）甲知郷府中にあつた。文章卷七「祭城山神文」によれば八十九郷二十万口「懺悔會作三百八言」には二十八万人部内と見えてゐる、道眞はこの地に恐らく二三の幼少の子を伴つたのみで單身この地に赴いたのである。以下その生活について上述の三点から眺めて見よう。

第一は道眞の詩人としての個性的本質に對する自己覺醒である。現在の吾人においては道眞の性格才能が本質的には詩人である事は略々明かであるが、この事は彼の生前及びその死後においても一般周囲の人々からは大して明確な認識がなされたとは考へられない。彼が死後詩文の神として考へられるやうになつたのは少くもその死後五十年を経過した頃からであつて、それ以前はむしろ天満大自在天神として天變地異殊に雷神を支配して自己の怨恨を報いる神と考へられてゐたのである。そしてこの自己本質についてはまた道眞自身もこの讃岐時代に至るまでは明確なものがなかつた。彼が若年ひたすら努めつつひたすら望んだ地位は文章博士であつたが、この文章博士は文章家であると同時に儒學を教授する大學の職員であつて、政治にも必ず關係が予想されること前述の職原鈔の言の如くであり、且つ文章家といふも或は紀傳道の學者、或は宮廷修辭的詩人、或は願文・上表文の草案者といふが如き雑多な性質を併せ含むものである。要は平安朝前期における文章經國の思潮に乗つて新しく注目されるに至つた貴族官僚の一地位であつたから、其處には世俗的榮譽は輝いてゐても、同時に學閥的・氏族間的關係によつて汚がれ易い地位であつた事も考へられる。か

かる性質の文章博士の地位を目指して一意勉學に精勵した道眞には未だ自己の本質が眞に自覺される筈がなく、精々儒臣としての榮達の目標がここにかけられてあつたものと云つてよい。ましてそれが彼自身の力によつて開拓せられた道ではなく、いはば父祖三代に亘る文章博士の家の、且つ亦大學寮文章院西曹を司るべき家筋の子弟として豫め開かれてゐた道を進んだに過ぎぬに於ては尙更である。この父祖の遺業の恩惠といふ事は文章博士就任前後の彼が常に自らも思ひ人にも示したところであつて、この点彼の心情に一種の弱々しさといふものを見ることが出来るのである。

しかるに彼の父祖について各代の性格・家風をうかがふ時、其處には上述の如き世俗的榮譽ある地位或は平安朝的門閥的風潮に巧みに身を處すには種々の矛盾を思はしめるものがあつた。古人は清貧にして人におもねらずといはれ、清公もまた風流にして佛教に信仰篤く詩學上の著書の多い事は菅家四代の中第一に居るのである。是善も世事忘れたるが如しとその傳に見えてゐる。(續日本後紀清公傳・三代實錄是善傳)即ち菅家各代は清貧孤高、時流を超越した詩人的乃至學問的な家風を純粹に維持して道眞に至つてゐる。道眞の天資もまたその一生を通じて見るにこの家風にそむくものではなかつた。しかも時代の降るにつれて前述の如き文章博士の地位をめぐるつての世俗的獨流の波瀾は既に是善の時代に相當大きなものとなつてゐたらしく、是善はその子道眞に對して必ずしも文章博士の地位に至ることを喜ばず、その就任の時却つて獨りこれを憂へて、道眞に對して「人情を畏れ慎めよ」と諭してゐるのである。(文章卷二博士難)

道眞のいはゆる詩人的性格は既にその二十三才より二十五才の頃、彼の秀才時代に於てその詩の中に著し

くなつて居り、自然に對する或は自己心情における繊細・多感・沈鬱なるものが見られる。果して彼の文章博士就任後、是善の死の直後から前後三年に亘り四回の不快なる誹謗がなされ、彼またここに「博士難」・「有所思」・「詩情怨」の如き詩に於てその惱みを語つてゐるのであつて、詩情怨には彼がその地位を捨てて出家し佛門に入らんとの心境にさへ至つたことを語つてゐるのである。而してこの間かの秀才時代に示された彼の詩人的性向は深められ且つやや自覺されるに至つたのであり、この事は紀長谷雄に與へた「勸吟詩」(文章卷二)にうかがはれ、且つ亦渤海大使裴文籍は道眞の詩を白樂天に似たりと評したのであり、それに對して彼自身は自らを元稹に比したらしく思はれる点がある。

勿論このことは彼が儒家としての意識を有つてゐた事を否定するものではない。彼の文章博士への志向は元來儒臣としての貴族官僚的地位乃至は王朝宮廷文化における地位を意識したものであり、それは延いて彼が太宰府流謫時代の作「樂天北窓三友の詩を讀む」にも「我は儒者」なる語が見られる。その性行に謹直嚴正なるものあり、世評に對する競々たる態度にも謂はゆる學者的なるが見えるのであつて、それは類聚國史の編者たるにふさはしいものである。然し乍ら道眞におけるこの儒者的なるものはどちらかといへば、彼の教養及び社會的地位によるところの外部規定的意識であつて、彼の内面的な本質によつて規定せられたものではない。旁々當時の儒者・儒臣はいはゆる近世道學的儒學者と異り、多分に教養的・修辭的・詞人的であるにおいては尙更のことである。

かうした道眞が今や讃岐に赴くのである。心には憂ひを抱き單身孤獨の身を以つて新しい風光に接する。

其處にゲーテのいはゆる客觀的なるものが、彼の内面に於て詩的燃焼の素材となつてゆくことは想像に難くない。讚岐時代の詩はそれ以前の宮廷應製の詩の如きに比する時、教養的修飾の剝落、内面的心情の吐露、客觀的具体性、及び個性的表現の点においてはるかに純粹素朴なるものとなつてゐるのであり、人間道眞はここに至つて具体的に把握され得るのである。そして事實彼も亦、この讚岐における生活の一年後において始めて「讃州刺史は本詩人」なる自覺に至つてゐるのである。それ故以下敘述はやや文學的に流れる嫌ひはあるが、彼の讚岐生活四年以上に亘る中、最初の一年間のみの感情をその詩によつて例示したい。

彼の讚岐着任は三月二十六日なること文章卷四の四年三月二十六日の作によつて知り得るが、着任早々は庶務上の餘暇なく、且つ當時讚岐國に旱天の憂ひもあつて、彼の詩作が途についたのはその秋に入つてからである。

初涼計會客愁添 不覺衣衿每夜露

五十年前心未懶 二千石外口猶拊

家書久絕吟詩咽 世路多疑託夢占

莫道此間無得意 清風朗月入蘆簾（早秋夜詠）

國守としての彼の地位が未だ彼の口を拊してはゐるが、四十二才にして尙その心情は枯れることなく、秋に涙し詩に咽びつつも、清風朗月を得意とせんとする如き、詩心しきりに動きつつあるを知る。そしてこれにつき「新月二十韻」・「秋天月」・「秋」の如き作が生れてゐる。重陽の日には國府の庭にも菊が薫り、彼

は村老を招いて小飲しその間に租稅輸送の件を議し、訴訟をきいて筆を走らせてゐる。

やがて冬。彼は着任後程なく初めて白髪を見出してゐるが、

客舍秋徂到此冬 空床夜々損顔容（客舍冬夜）

によればその憔悴の面影がうかがはれる。世事を思つて夢も結び難いが、僅かに兒童の詩を吟ずるを學ぶのを見て心を慰めてゐる。歳末除夜には寒風吹きすさぶ中にまどろんで夢に一家の事を見た。（旅亭除夜）

仁和三年の春。元旦には村老を招いて酒を酌み眉の開けるのを感じた。（旅亭歲月招客同飲）然し本來的な孤獨感は又しても襲つてくる。「早春閑望」はその心を詠じたものである。

早起灰心坐、冥々是夢魂、雲中山色沒、雨後水聲喧、強道春先至、猶知日未暄、廻頭無外物、漁叟立沙村、國府は海邊に臨み、「廻頭左右皆潮戶、入耳高低只棹歌」であつて、これにつけても京師宮廷の生活が思はれてゐる。（正月二十日有感）

然し春が闌になると彼の心も自然綻ぶものがあつた。

偶得衙頭午後閑 二三里外出尋山

鳥能饒舌溪邊聽 花有亞枝馬上攀

要賞煙蘿占遠入 嫌繁案牘懶先還

從初到任心情冷 被勸春風適破顏（春日尋山）

恐らくかかる自然への没入は彼の生涯の初めての經驗であつたと思はれ、これ以後彼の心にはこの地のすべ

ての上に親しみと温情の湧くものがあつたことがその詩に察せられる。前任者安倍興行が廳前に櫻樹を植え置いたのならつて、彼も亦小松を植え、彼の最も好んだ菊を植えたりしてゐるのもその小さな一つのあらはれであり、尙その他については以下述べるところに見ることが出来よう。

以上は彼の赴任後一年間の彼の心情の一端を示したものにすぎないが、其處に彼の詩情が宮廷生活時代とは異なる心情の深さを開拓し得た事は知られるのである。仁和三年八月光孝帝崩じ、彼は一時任地を離れて歸京し翌四年春まで滞在した。そして再び任地に赴く途中明石驛で次の詩を詠じた。

離家四日自傷春 梅柳何因觸處新

爲問去來行客報 讃州刺史本詩人（題驛樓壁）

而してかうして自己を詩人として見出した彼は、以後その行動の一面に詩人としての拘泥のない態度が示され、それが彼の周囲の人々の注目する所ともなつた事も知られる。春日獨遊（文章卷四）の如きがその好き例である。

放衙一日惜殘春 水畔花前獨立身

唯有時々東北望 同僚指目白癡人

花凋鳥散冷春情 詩興催來試出行

昏夜不歸高嘯立 州民謂我一狂生

日長不得久眠居 出引諸兒且讀書

適遇多情垂釣叟 各言其志不言魚

彼の詩人としての自覺及び成長は以上によつてほぼ明かであらうと思はれる。然しかかる彼の詩人的成長は一面彼の地方官としての立場及び彼の思想的成長と相伴ふものであつて、これを一面的に引離しては考へられない。故に以下は、前掲第二の点たる地方官としての道眞について見る事にする。

三

従來讃岐守としての道眞についてはその治績について見るべきものがなかつたとされ、或は前掲春日獨遊の詩の「白癡人」・「一狂生」の語を引用して、彼が州民の嘲りを買つたとなし、以つて彼の政治的手腕を否定的に見ようとするのであるが、然しこの事は根本的に彼の讃岐守時代に對する閑却と彼の個性に對する内面的理解の缺除によるものであつて、卑見によれば彼は少くとも州民のために誠意を以つて政治に當り相應の反響を得て居り、且ついはゆる「州民の嘲り」なるものが、事實その名を以つて彼を呼んだとしても、それは詩人の何物かを知らぬ世俗の言説であつて、それが政治に害のない限り、何ら彼の價值を傷付けるものではないと考へるのである。

いはゆる目ざましき治績、狂瀾を既倒に回らすが如きものの彼になかつたことは彼自身を認めるところで

あらう。然しそれは讚岐國が二代に亘る前任者即ち安倍興行及藤原保則の有能國司によつて比較的といふよりも最もよい状態に於て道眞に引き渡されてゐるがためである。このことは彼自身が「路過白頭翁」の一篇中に於て認めてゐるところであり、彼はその餘惠により政務の余暇を得て詩作することの出来るのを感謝してゐるのである。しかも彼は在任中州民のために理解ある嚴正なる政治をなしたのみならず、歸京後中納言時代に檢稅使派遣の議あるや、この讚岐守時代の體驗を以つて、地方人民のためにこの使の派遣に反對してゐるのである。それは單なる中央官僚の意識に於ては不可能の事と思はれる。

さて上述來、彼の詩人的成長を説くに際し、あたかも彼は赴任一年間、綿々として自己の心情にのみ沈潜して他を顧りなかつたかの如き觀を與へたかも知れないが、それは説明の便宜上の事であつて事實はもとよりさうではない。彼の眼は着任以來一方常に民衆の上に注がれ、それがまた直ちに詩となつて生れてゐるのである。着任早々三十日來の旱天であり、彼は國分寺に百講會を行ひ幸ひに降雨を見てゐる。(金光明寺百講會有感)重陽の宴には村老を招いて席上政治・租稅輸送の事を論じ訴訟について筆を走らせてゐる。三善清行の藤原保則傳に彼が讚岐守たりし時の事を述べて「此國庶民皆學法律執論各異、邑里彊畔動成訴訟」と云つて居り、この風も保則の感化によつて穩になつたと記されてゐる。従つて道眞の態度も恐らく慎重なるものがあつたであらう。赴任最初の秋もやや深まると彼の眼は先づ貧しい人々にそがれて「寒早十首」の詠となつてゐる。地方官としての彼の着目した点が如何なる範圍に及び如何なる現實の深刻さにまで達してゐるかを知るためにその全文を掲げる。

何人寒氣早 寒早走還人 案戶無新口 尋名占舊身

地毛鄉土瘠 天骨去來貧 不以慈悲繫 浮逃定可頻

何人寒氣早 寒早浪來人 欲避通租脚 還爲招責身

鹿裘三尺弊 蝸舍一間貧 負子兼提婦 行行乞與頻

何人寒氣早 寒早老鰥人 轉枕雙開眼 佝僂獨臥身

病筋逾結悶 飢迫誰愁貧 擁抱偏孤子 通宵落淚頻

何人寒氣早 寒早夙孤人 父母空聞耳 調庸未免身

葛衣冬服薄 蔬食日資貧 每被風霜苦 思親夜夢頻

何人寒氣早 寒早藥圃人 辨種君臣性 充僇賦役身

雖知時至採 不療病來貧 一草分銖欠 難勝篋決頻

何人寒氣早 寒早驛亭人 數日忘凜口 終年送客身

衣單風發病 業癯暗添貧 馬瘦行程澁 鞭管自受頻

何人寒氣早 寒早賃船人 不計農商業 長爲僣直身

立錐無地勢 行棹在天貧 不屑風波險 唯要受雇頻

何人寒氣早 寒早釣魚人 陸地無生產 孤舟獨老身

鼻絲常恐絕 投餌不支貧 賣欲充租稅 風天用意頻

何人寒氣早 寒早賣鹽人 煮海雖隨手 衝烟不顧身

早天平價賤 風土未商貧 欲訴豪民權 津頭謁吏頻

何人寒氣早 寒早採樵人 未得閑居計 常爲重擔身

雲巖行處險 壘牖入時貧 賤賣家難給 妻孥餓病頻

道眞がもし單なる主情的詩人であつたならば、またもし單なる王朝宮廷詩人であつたならば、即ち云ひかへれば彼が眞の詩心の所有者でなかつたならば、そして眞に政治に誠意あるものでなかつたならば、決してかかる詩は生れ出でなかつたであらう。たとへ彼に儒教的教養があり支那文藝における表現が其處に作用したとしても、ここに詠まれた貧しき人々は、確かに王朝時代の庶民であり、貧土に結びつけられたために、租税や賦役の重荷のために、宿命的な不運のために、悪吏強豪のために、自然の暴威危険のために、商業未發達のために、貧にあへぎ貧におののく姿が、彼等の聲として表現せられてゐる。着任半歳に足らずして既

ここにまで庶民の生活を觀察すること自体が一般の官吏に可能なことであるとは限らないのである。思へばかかる詩が平安朝貴族文藝の中に遺されてゐることすらむしろ奇異な現象とも云ふべきである。華やかなる宮廷生活において、花鳥風月に詞の綺羅を飾つてゐた道眞は、讃岐に至つて俄然、かの万葉集の山上憶良に並ぶ人生詩人・庶民詩人に生れ變つてをり、生活苦にあへぐ人々の味方となつた。事實に於ては次にのべる様に當時のこの地方の人々はさまで惡政に苦しんでゐたのではないとも考へられるのであるから、彼のこの觀察はむしろ現實以上の人間生活といふものの宿命的な生活苦を汲み取つての象徴的な作かとも思へるが、然し其處に表現されたものの生々しさは確かに具体的觀察から來てゐるもののあることを感ぜしめるものである。

以上は先づ彼の政治家としての庶民生活に對する觀察であつた。それに對して彼自身の政治家としての心組みは如何なるものであるか。この点について語るものには「行春詞」の長篇がある。今その大要を摘記すれば、彼は先づ自己の政治的才能について反省し「愚才短慮何ぞ亂繩を理せんや」と云つてゐるが、一面その政治的意圖としては勿論當時の政治理念たる儒教的觀念に立脚してのことではあるが、萬事に仁義を以つて行ひ、先づ農作物の豊稔を祈り、晴天には府庫の修理をなし或は池溝をひらき、或は窶のものを免じて罪を軽くし、宿惡のものを懲らしめる。更に長幼の序を正し、貧しきものが富強に凌がれる事なきを期し、自らは疏食に甘んじてよるべきものを賑恤し、且つまた度々民情を視察する。かくてたとへ自己の善政を天が認めて白鹿の瑞祥を下すが如き事はなくとも、幸に人民から蒼鷹の名を以つてよばれることなく濟んでゐる

る事を述べてゐるのである。この詩は彼の赴任翌年晩春における民情視察の一日を詠じたものであり、朝日と共に出立ち歸館した時は既に暮雲がせまつてゐたと記されて居て、彼の政治に對する意圖が半ば思想的に半ば現實的行動として語られてゐるものである。

事實彼はかかる民情視察を幾度か行つてゐるらしく、且つまた直接に、人民に親しく話しかけてゐるのである。行春詞に「縹緲家門留問主、耦耕田畔立尋朋、遊童竹馬郊迎澆、隱士藜杖路次興」といふのも、彼の巡察中の彼の態度及び彼に對する庶民の安易な様子を語るものである。更に「路過白頭翁」の如き、或は「蘭筥翁問答」の如きは具体的に國司たる彼と賤しき翁との會話の内容を傳へてゐるものである。白頭翁の詩は公が路上「白頭雪の如く面猶ほ紅」なる、年老ひてしかも血色よき翁に出會ひ、その九十八才の高齡にして妻子もなく三間の茅屋に家財もない翁が、前任二代の明府安氏即安倍興行と使君保即ち藤原保則の善政の餘慶をうけて「妻なく農せず心自得す、五保に衣を得て身甚だ温なり。四隣共に飯して口常に食す。樂しみ其中に在り、憂憤を斷つ。心他念無し、筋力を増す。鬢髮霜氣の侵すを覺えず、自然に面上桃花の色なり」と語るをきいて、その善政の餘徳を感謝して將來を自ら戒め、巡察の間に詩を賦す事の志を言つたのである。蘭筥翁との問答は二問二答の四篇の詩からなつてゐるが、六十才の隻脚の蘭筥翁の老翁にその隻脚の理由、その職業、生活状態を尋ね、斗米を施して歸らしめた事を云つてゐる。共に彼の人民に對する温情とその善政に對する意圖を知ることの出来るものでなければならぬ。

而してかかる彼の庶民の生活苦に對する温情を善政への意圖とは一面に於ては政治惡・社會惡に對する嚴

正な態度なくしては考へられぬものである。地方官の任務は一には中央政府に對する租庸調の完納のための人民からの收奪の面があると共に、他面その根源たる人民の生活の安定が要求せられることは古今を問はず一國の政治上の通則であるが、この間にあつて最も通弊あるものは吏僚の貪欲と惡徳及び在郷豪強の惡行爲である。彼は赴任四年目の夏に「苦日長」の一詩を賦し、その中に自ら「政嚴にして人到らず、衙を掩ひて吏集るなし」と云つてゐる。從來彼の政治が不人氣であると判断されたものの一因は専らこの句によつてゐるが、その不人氣とはそれが事實とすればむしろかかる吏僚・豪強の如きものの間のことであつて、その政務が嚴格であつたことを意味しても以上の如き人民に對する溫情を否定するものではない。この事は行春詞に「辭謝頑民來謁拜」といひまた「輕舉蒲鞭宿惡懲；單貧恐富強凌」といへるものとも通じてゐる。「掩衙吏無集」といふのも彼が社交的でなく、職務以外には吏僚との交際が少かつたことを云つてゐるのであり、彼が孤獨を愛する詩人的行爲に身をまかせたことを意味するのであつて、前掲春日獨遊中に「同僚指目白癡人」、「州民謂我一狂生」といふのに通じてゐるものと解すべきである。彼の交友の少きことは京師宮廷に於て既に然りであつて、地方吏僚の如きには尙更交り難きものがあるのは、彼の性格の致すところではあつても、それが人民に對する政治上の不手際を意味することにはならぬであらう。

かくて彼はその一年を經過して、前述の如く一時歸京した。船にての途中下僚からの一封の書狀を受取つたが、それには州民が彼の歸京をきき再び讃岐へ歸任せぬのではないかと案じてゐると報じてあつた。既に彼は松山の客館に小松を植えてゐたのであり、この報を見て「當州若不重來見、客館何因種小松」と云つた

のである。(得倉主簿寫情書、報以長句、兼謝州民不歸之疑)この一事によつても従來の説は訂正される必要がある。

四

諫閣中の半歳を京師に留つた彼は仁和四年二月再び任地に歸つて來た。過去一年間の地方官の経験の間に彼は自己の心が一つの方向を得ると共にその環境にもなじむことが出來て、以後任期満了までの二年間の彼の心境には、一種の自由感のあることを考へさせるものがある。その自由感とは即ち事にふれ機に應じて主となり得ることである。歸任の途中彼は明石の驛にて「讃州の刺史は本詩人」と詠じて、ここに始めて自己の本質が自ら語られた。これこそ彼の心に最も大きな安定をもたらすものでなければならぬ。然し彼は亦一面職務上には讃州の刺史であり、この一面にもまた彼はその忠節を盡さうと決心する。歸任後間もなく着任三年目の日、三月二十六日には記念のために村老を招いて酒を酌まん事を云ひ、且つ、

好去鶯花今已後、冷心一向勤農蠶(四年三月二十六日作)

と結んでゐる。詩と職務、本心と境遇夫々に應じて彼は今やとらはれることなく、共に自由な氣持を以つて忠實であらうとする。そして、この態度が彼にやがて新しい人生觀の生じつつある事を予想せしめるものであつて、それが即ちこの時代の前掲第三点である彼の思想の變化に關聯をもつて來るのである。それ故今、以後約二年の彼の行動を語ることは、一面過去一年の行動について、詩人としての彼と、政治家としての彼

との二面について見終つた点に重複する感があるが、尙第三点に入るための過程として略述したい。仁和四年は夏に入つて雨が少く、旱天の徴があつた。當時の地方政治にとつてこの事は決定的な影響を有つ。既に前年白頭翁に遇ひ前任者の治績をきいた時も、保則の時代は「臥聽如流境內清、春不行春遍滿、秋不省秋大成」であつた事を知り、「就中何事難仍舊、明月春風不遇時」といつて、天候不順を恐れてゐたのであるから、この旱天に對しての彼の心痛は相當なものであつた。

不雨應緣政不良、唯憑大般若經

これは雨の多いことを報じ來つた大江維緒に送つた詩であるが、ここにも政治に對する自己の反省が見られる。そしてかかる旱天に對する手段としては、ただ神佛に祈請する他はないのであり、彼は蓮池の詩（無題・今假に稱す）及び祭城山神文において、國司としての熱誠を神佛に捧げてゐることを示してゐる。蓮池は國府の北にあり、元慶年中の惡政時代には花を開くことがなかつたが、仁和以來の善政に應へるかの如く開花した。彼も着任後の巡視の中これをきき、夏の花時に至つてその花を摘み、部内二十八寺の佛に捧げ、且つ香油をも供養して佛恩に謝した。その心は「先づ海内長く無事なることを祈り、次に城中大いに年有ることを願ふ」たのであつた。しかるに今年は旱天であり、蓮池も枯渴の状態であり、彼はそれを専ら自己の政の拙きに歸して祈つてゐる、

應憑政理每多愆 魂迷案響顛羸馬

手拙揚薪爛少鮮 儒館罷歸雖叱咄

吏途蹶歩更進遭 刻肌刻骨身爲鏝……

また祭城山神文の捧げられたのは五月六日であり、文中「嗟乎命之數奇逢此愆序、政不良也感無徹乎」と云ひ、八十九郷二十萬口、一口の愁ひなからん事を祈つてゐる。恐らくこの年は旱飢といはるべきものがあつたらしく、その冬に至つて雪を見た時は、來年こそは旱飢を免れることが出來ようと云つてゐる。（客居對雪）

この他政治に關するものには、「懺悔會作三百八言」がある。懺悔會は年末三日間に國內人民の罪過を懺悔して人民の苦患を佛力によりて救ふ行事であり、清和天皇の御代に始まり宮中を初め諸國一同に行はれたものである。文中また彼の信仰を示してゐるものがある。尙翌寛平元年は天候順調で人民も彼に對して賀してゐる事が見える。

田父何因賀使君 陰霖六月未前聞

滿徭僚吏雖多俸 不苦東風一片雲（喜雨）

一方彼が詩人としての境地に徹したものであることは、既に春日獨遊三首の如きに於て例示した。彼は常にその肉體の老ひに比して心情の枯れぬ事を云つて居り、且つまた赴任の事情は彼をして客居の愁のみにとどまらぬ感を與へてゐるのであるから、その詩が感傷に満ちてゐることは敢て論ずるに足りない。また任期後半に入り歸京の日がせまるにつれて、歸心しきりに動くことも自然である。そしてこのことが自ら贈答の詩を多くしてゐる。然し一方にその心境の變化を語るものとして、卷四には對鏡・白毛數の如きを始めとし

て老齡を歎ずる言句と交つて、法華寺白牡丹・題南山亡名處士壁・客舍書齋・齋日之作・路次見芭蕉・冬夜九詠・僧房屏風圖四首の如き、枯淡にして超俗的な趣のあるものが見えてゐるのであつて、これらはやはり次に述べる彼の思想の變化に關聯するものと思はれる。

彼は寛平二年春四十六才になつて任期満ちて京に歸つたが、以後一年間は功過判定するまでは出仕することなく家に閉じ籠つてゐた。そしてこの間彼は莊子を耽讀し、「北溪章」・「小知章」・「堯讓章」を作つて自己の感慨を述べた。それは彼の讓岐時代における體驗によつて生じて來た人生觀の表白とも云ふべきものである。それ故今ここに彼の讓岐時代の思想的變化即ち前掲第三点について述べて拙文を終り度い。

結論的に云へば、彼はこの時代において儒教的思想から老莊的思想への傾きを有つに至つた。より適切に云へば儒教的思想の上に更に老莊の世界への視界を體驗的に獲得したといふべきであらう。上述莊子による三篇は共に超俗的な逍遙遊の心を述べたものであり、北溪章においては垂天の翼を張つて飛翔する大鵬と微小なる蜩とを比較して、「自得之場異りと雖も逍遙の道は惟れ同じ」とする。萬物は與へられたままに自得すべく、其處に逍遙遊の境界があることに何等差別なきことを云つてゐる。小知章も亦同じであつて、無功之神、無名の聖こそ逍遙自適の大知であり、無待の心こそが絶對であるとする。そして我執を去り分別の知を去つて、天性の理に安んずるべきことを云ふ。堯讓章は堯と許由との故事を引用して保身の道の此處に存することを述べ、天下を把握するも鶴鶴偃鼠の遊ぶ心も、その間に差別なしとするこの兩聖賢の優遊の心情

を語つてゐる。ここに彼が如何なる心境を今や見つけてゐるかを知る。曾つて文章博士の地位に喜憂し一家の地位をめぐる嫉視に惱まされた彼は、更に讚岐赴任によつてその詩心を動かされること切なるものがあつたが、都會的な俗塵を離れたその土地は、彼をして純粹な詩人としての天性を自覺せしめたのであり、素朴な庶民に接することによつて、反つて地位身分の何物たるかを知つた。白頭翁の心境の如きは正に老莊の境界とも云ふべきものであつた。仁和三年一時歸京の途中の作「舟中に宿る」、「舟行五事」の二篇は著しくかうした心境を示してゐる。前者にあつては、一生を旅と見、この旅中更に舟にあること正に浮生なる事を云ひ、舟中の鹽商や漁夫と相語つて俗塵を忘れ、「更に家情を問ふに懶し」とまで云つてゐる。

舟行五事には著しく老莊の思想の影響が見られ、それが舟中に経験した事實を通じて彼の境遇に思ひ合はせられてゐる。その一は絶海孤島上の一本の松を詠じたものである。無心の雲や雪と共に育つてその松は、自然のままに緑濃やかに、その材は使用に耐えぬ故に却つて伐られぬ事を云ふ。これ明に莊子の影響である。そしてその松に對比して、東南の嶋の赤木がその材の美しきために貪吏の斧刀を免れず、天性の壽命を保たぬ事を云つて、「文章誠に畏るべし」と自己の過去の境遇に思ひ合はせてゐる。その二は白頭の漁夫が舟中に釣を失ひ悲しむを述べ、「此釣相傳へて久し。哀れなるかな痛極りなし。子孫何物か衣食を遺さん」といはしめ、老身今更農ともなり得ず牛飼にも適せず、慣れたる仕事をかへること、例へば「儒者が官吏となつて天下の物笑ひとなるに同じ」と云はしめてゐる。即ち漁父の口を辯りて彼自身を歎じてゐるのである。その三は狩りするものに追はれて母子離れ々々となつて、窮して海に入る鹿を詠んだもので、獸にして

海を渡る悲哀を見て「客有離家者看騰濺血啼」といふ。その四は鹽商が利を追つて舟に乗り、暴風に遭つて難破し、却つて一生の計を失つたこと詠み、「冒して進むものはかくの如し、心を虚にするものは自由なり」と云つて、莊周を學ぶべきことを教へてゐる。五は斷食の僧として世上に評判のある僧に米三升を與へ、僧はこれをよるこび受けたことを述べ、世評の無謀苛酷なることを諷刺してゐる。

以上によつてこれらの文中には、常に彼の境遇が省みられると同時に、それを救ふ道が莊子にあることを彼が云はんとしてゐる事は明かである。

かくて再び讃岐に歸つた彼は、更に老子五千言を尊んでゐる。文章卷四の「客舍書齋」によれば、彼はこの地に十帙餘の書を隨へて來てゐるが、それらは醫書と白氏文集と漢書及び老子であり、老子については「五千文貴立言虚」と言つてゐるのであつて、「心を虚にするものは自由なり」といふ彼の思想がこれによつても養はれて行つたことが知られる。そして最後の年の夏には自己の過去を顧みて、この名利の念の餘りにも強かつたことに思ひ至つてゐる。この意味で「苦日長」の一篇はその意味深長といふべきであり、これを以つて彼の内的苦悶の、また彼の性格・思想の最も端的な告白と見るべきであるから、以下全文を掲げて置く。

少日爲秀才 光陰常不給 朋交絕言笑 妻子廢親習

壯年爲侍郎 曉出逮昏入 隨日東西走 承顔左右揖

結綬與垂帷 孜孜又汲々 榮華心尅念 名利手偏執

當時殊所苦 霜露變何急 忽忝專城任 空爲中路泣

吾黨別三千 吾齡近五十 政殿人不到 衙掩吏無集

茅屋獨眠居 蕪庭閑嘯立 眠疲也嘯倦 歎息而鳴悒

爲客四年來 在官一秩及 此時最收息 烏兔駐如縈

日長或日短 身騰或身蟄 自然一生事 用意不相襲

其處には歸心矢の如きに悶える彼の姿があるが、然し過去の名利への偏執とその結果を顧りみてゐる彼には、既にさうしたもつから脱し去つてゐることがうかがはれる。それは必ずしも彼の性格を一變せしめたものではないにしても、とにかく彼に一面老莊の境地が體驗的にひらけて來て、無功無待の境界の價値を認めるに至つてゐることは考へられる。佛敎的教養も先祖以來深く、彼においてもその空觀は教へるところがあつたであらうが、然し彼は出家すべく餘りに本來詩人であつた。詩人はあくまで人間であるべきである。この点から彼の人生觀が今や老莊に求められてゐることは最も自然であり適切なものがあつた。歸京後の莊子による三章はさうした人生觀の表出として彼の中に結晶したものである。

五

以上において豫定せられた三点の考案を終つた。彼の讀岐時代は彼の一生中最も多彩な部分であり、道眞に對する理解のために主要な一時期であることが、以上によつても考へられるであらう。稿を結ぶに當つて尙この時代がこれ以後の彼の行動に關聯する一二の点を掲げて置くならば、先づ詩人としての彼の完成はこ

の讃岐時代に一度び成され、それが太宰府時代に二度びなされたことは云ふまでもない。彼の讃岐時代の詩は宮廷に於ても認められたと見るべく、後に彼が醍醐帝に菅家三代の詩集を献することになつた發端は、帝が彼の讃岐時代の詩を求められたことから初まつてゐるのである。宮廷詞人から一度は民衆生活詩人にまで至つた彼の詩的體驗の價値は、王朝宮廷貴族の子弟としての彼としては大きいといはねばならない。

第二は地方政治の體驗が後年中納言時代の檢稅使派遣に際しての彼の反對奏上文となつてあらはれてゐることである。このことは既に上述文中に少しく觸れた。それは文章卷九に全文が見え、寛平八年七月五日に奏上されてゐる。極めて長文であつて今ここに全部を載せることは出来ないがその大要を云へば、當時租稅收納の状態が悪化したためにこの議となつたものであるが、彼はこの議の最初からこれに反對し、「臣の見る所は只讃岐一國也。彼國の風を以つて論ずるに若しこの使を遣さば頗る物の煩ひあらんか」と云ひ、他の不快を招いたが、その後議を究めるに従つて、帳外剩物の内三分の一乃至二分の一を返給することに決せんとして、彼も中央財政本位に考へる場合、これに反對も出来なかつた。然し彼は尙ほ心決せず、「伏して思ひ起きて慮り罷めんと欲して能はず」、治術に達したるもの小野葛絃等の一二の者に相謀るに、「此事をききて愁悶せざるなし」といふ状態であつたため、終にこの奏上となつたのである。その論ずる所租稅徵集の實情・正稅と出舉の關係・國司の配慮・帳外剩物の使途・地方民に及ぼす影響等について數字をあげて説いてゐるのであつて、地方官としての經驗、且つ民情に理解あるものにして始めてなし得るものであることを知る。「況んや世衰へ國弊へ民貧しく物乏し、是の故に或は國司文法に乖いて以て方略を廻し、正道に違ひ

て權議を施す。動くこと己がためにせずと雖も其事皆法を犯せり」と云ひて國司の收税の苦心を云ひ、或は「天下分憂之吏、必ずしも奸盜の人に非ず、適々奸人私用の疑ひ有るに依つて専ら良吏非常之儒を收めらる。巨大に恐るる所は後代股の肉を割いて飢を療するの喻あらん事を。是れ國司のために治術を失ふべし」とも云つてゐる。帳外剩物を中央財政の缺乏のために收納することは地方財政の治術を失はしめることであり、國司の苦しむ所であると同時に人民の困苦となること明かである。「是れ百姓のために愁苦を致しつべし、其否の二也」の語によつてもその論旨はうかがはれ、それが彼の讃岐時代の彼の態度に一貫したものであることを知るのである。

第三はその人生觀乃至老莊思想の点である。而してこの点は第一彼の寛平三年藏人頭就任に始まつて右大臣昇進に至る目ざましい榮達中における心境に關聯し、延いては彼の左遷問題についての彼の立場について消極的ではあるが何等かの示唆を與へるものである。彼の昇進は専ら宇多帝の意志によるものではあるが、讃岐時代の彼の感慨、殊にこの思想の展開を見た後に彼の昇進を見る時、かかる昇進がそのまま彼の得意とするところ、意を安んじ得たものであつたか否かは略々想像の出来るところである。それは既に文章博士時代において經驗し、讃州赴任を自ら一種の左遷と感ずるものがあつたのに於ては尙更である。彼の藏人頭の辭表・右大臣の三度の辭表における彼の辭意の強さが單に儀禮的なものでない事が、この点からも明にされるのでなければならぬ。その第一表に「臣地非貴種是儒林：人心已不縱容鬼瞰必加睚眦」といひ、第二表に「若不獲已可就朝列、猶踞爐炭以待燒亡履冶氷而期陷浚矣」と云ひ、最後に第三表に至つて「削臣官以全臣

福接臣纏以保身」と云つてゐる。老莊の思想の究極はこの保身の術であつて、彼の願ふところ眞に此處にあつたことは認めてよいと思ふ。然し宇多帝の意志が絶對であり、その信任に對して謹直な彼は感激をもつて應へなければならなかつたのであつて、それが彼に太宰府左遷をもたらしたのであるが、それは即ち彼が宇多帝のために一身を犠牲に供したものであつて、彼には自ら決し自ら慰めるものがあつたと思はれるのである。

而して第二にこの老莊的傾向の点が太宰府時代の彼の中心的な心境となつてゐることは菅家後集をうかがふものの知るところである。その詩は涙に満ちてゐるとも云へるのであるが、それら詩的表現を纏つて、萬事を自然にまかせる姿がのぞいてゐる。後集中最大の長篇敘意百韻の激烈な調子の中にも、その乏しい生活の苦しみをのべた後、「既に生之苦しみを慰さむ、何ぞ死の過かならざることを嫌はん」と云ふが如き、或は更に虚室白を生ずる夕方の薄明の中に、老莊の保身の論をしのんで「常の道に乖くことなく、まさに自然にまかすべし」と云ふのである。其處には既にこの地に屍を埋ることを覺悟した彼にとつては、佛教信仰の著しいことも明かであるが、それはむしろ死後の問題であり、現在の心境は専ら老莊の境に生き、それが詩人道眞を支へてゐるのである。そしてこの老莊思想が彼の讃岐時代に端を發して今やここに至つてゐることを知るのである。讃岐時代の体験は種々なる意味で道眞に働きかけてゐることを上述のところからも見る事が出来るであらう。